一字姓と二字姓

中村直勝

一

天長九年（八三二）二月十五日淳和天皇が下された勅書に「朕の男女は、数人に過ぎず」従って空しく府庫を費すとも思われない、その上、みな既に親王を號さしめておるから、今更、それを改めようとは思わぬ。また、今後に生れるかも知れない同母の男女も、今迄と同じ取扱いをする。その他の異母から生れた男女には「朝臣之姓」を賜う事にする、と仰せられ、且つ、太上天皇（嵯峨天皇の事）は、倹約の思召が深かったので「以碩茂之皇枝、降同編戸之庶姓、源朝臣氏是也」とも、附け加えておられる。

この勅書は、これだけを読んで見ては、何の事であるか、解釈が難しいが、これには、次のような歴史があっての事である。

二

わが国最初の公布令たる大宝令によると、天皇の皇子皇女を「親王」といい、以下五代までを「王」とし、それ以後は、皇族から外して臣籍に編入することになっておる。五世王までの生活費は、国庫の費用で負担するのである。

然るに、この令制を格守しておると、皇親の数は幾何級数的に増加するから、国府の負担では堪えられぬ事になってきた。天平年間以来は、二世王か三世王で、臣籍に降下させねばならぬ事になった。天智天皇の皇子は施基皇子であったが、その王子は弓削浄人と言って、早くも臣下の列に加わった（弓削道鏡はその弟）のは、その一例である。

三

天平をすぎると、もう二世王、三世王まで待ち切れない事になった。それで嵯峨天皇は弘仁五年（八一四）五月八日の勅書で「男女稍衆、未識子道、還為人父、辱累封邑、空費府庫、朕傷于懐、思除親王之号、賜朝臣之姓」と仰せて皇男女に「源」の姓を与え、すべてを臣下にされた。源信、源弘以下多数の源氏が現われた。有名な河原左大臣源融もその中の一人である。『本朝皇胤紹運録』によると十七皇子、十五皇女がある。

これだけ多数の皇子皇女では、仰せられるように、子道さえも弁えぬに、早くも人の親となる者も出ようし、かかる者をまで、国庫の費用で養われては、御意の傷む事もあろう。嵯峨天皇の措置は、已むを得ぬ事であった。

それについで出されたのが、さきに引用した淳和天皇の勅書である。

淳和天皇の場合は、皇子皇女の数は少く、五親王と十二内親王とであった上に、五親王の中の四親王は、生母が内親王であるので、母系の点からも、臣下の女を母としたものとは違うという特別の思召もあっての事であろう。だから臣下の女を母とする者については、臣籍降下の先例に倣うと仰せられたのである。

四

だが、ここで問題としたいのは、如上の臣籍降下の事情如何、という事ではなくして、どうした由来があって、「源」という文字が撰び出されたか、の疑問である。

五

桓武天皇の皇孫高棟王、その弟高見王、ともに臣籍に降下して「平」朝臣を賜うた。

爾来、仁明天皇、文徳天皇、清和天皇、光孝天皇、醍醐天皇、村上天皇以下の列聖も、その多くの皇子を臣籍に編入し「源朝臣」を下された

のであった。

六

そこで一考したいのは、どうして「源」及び「平」の字を、凡百の漢文字の中から、撰出したかの疑問であるが、それに対する解答は誰からも出されていないのである。更に、それが何れも一字姓であって「水原」とか「大平」とかいう二文字でない事については、それを疑問として提出されたこともないのである。

その平の方については、平城京、平安京の名にも使われておる「平」であるから、中国の理想である修身斉家治国平天下に由来する人道的な平和思想の表現たる美字であるのではないか。「源」は、その家の源は皇室であるとか、皇室を源とする家である、という意味からではないかと、漠然と諒解しておるのである。

それ以上の解釈が下せる史料は、なかなか見出せるものではないから、それの解決は他日を期する外はないが、昨年以来、私の心に搦み付いて離れないのは、源、平、という一字の姓の不可解である。

一字姓と二字姓とに差別があるのではないか。

七

中国の国名は古来、夏　殷　周　漢　秦　魏　隋　唐　宋　金　元　明　清と、ずっと一字である。その国内における地方名でも呉　越　魏　楚　遼　梁と、一字である。

それに対する周辺の国々はみな二字である。朝鮮　高麗　新羅　百済　勃海　台湾　琉球　安南　印度　天竺　波斯　西蔵　蒙古　匈奴。日本もその同類。

中夏は一字。四夷はみな二字。

個人の姓にしても、中国人は　毛　周　孫　李　劉　朴　権　王　蔣　孔　孟　趙　張で一字。それに対する日本人は藤原　長谷　田中　福

田　井上　野原　渡辺と言った二字姓が圧倒的である。

勿論、日本人の家名については、その起源は様々であろうが、その中でも主流をなすものは、その家の職業に基く、服部　河守　犬飼　鳥飼　土師　坂部（酒部）　綾部　大伴　建部（武部）等と、その居住する地名に因む蘇我　当麻　石川　紀　藤原　菅原　秋篠　長岡　小野　野辺　和気　坂上の類とであるから、どうしても二字姓になる事が多いのは、自然であろう。

世間には、次のような伝説もある。

沢　園　秦　畑　林　呉　泉　等のような一字名は、帰化人の子孫である、と。

そうなると、一字姓と二字姓との間に本末とか、上下とか、前後とかの区別があるのではないか。

八

「沢」という家があると仮定する。その家族が殖えて分家する。本家より西の方に家居が出来たとすると、それは西沢であり、北にあれば北沢ということになる。

「村」という本家から北村、西村が分かれる。その分家の北村や西村から、もとの本家を呼べば、本村であるか、中村であるかになる。

どうやら、一字姓の方が、本で、二字姓はその分家であるらしい。

そうすると、一字の方が上位で、二字の方は下位であるやに思える。遼が本家で遼東はその外属である。済が本家で、済南は分家である。卑弥呼は「委」の国王では認められない。「委奴」の国王としてなら認められたのである。委は一字であり、委奴は二字である。

九

そこで気になったのは、神武、綏靖以下の天皇諡号が二字である事である。

ことによると、この夢を掴むような不審から、歴史の奥庭が覗けるのではないか。

一〇

中国は、その国初以来、「民を以って重しとなし、君を以って軽し」とする国家である。帝王は国民のために存在するもので、国民は帝王のための存在ではない、従って、若し帝王が、国民の意志に反すれば（輿論を失えば）他姓の人に交替してもらえばよい、という事である。真の民主国家である。

治世者の交替する事を、易姓革命という。

天命（実は人望、輿論）が革まれば、治世者の家（姓）を替えればよい、という政治観である。要するに万世一系の国王ではなく、王朝の交替こそ、中国を永久たらしめるものである、とするのである。

そこで、中国では、王朝は常に交替するのであるから、自分の王朝も不日、他姓に交替される日あるべきが原則である。そして新立王朝は旧王朝の治績を記録し編纂して他日に伝えるべき事が、一つの義務である、とした。政治の道である、とした。

そのために、どの王朝もどの王朝も、自家が主権者であった時の治績失政を正確に記録保存し、次代王朝に交附すべき事が、また一つの政道であった。

中国において、極めて早い時代に、王朝の歴史が編纂された所以は、そこにある。漢書　晋書　隋書　以下がそれである。

それに記載する必要から、帝王に、何とかした名称を附ける事になった。これが諡号（おくり名、その人の死後になって追贈した名）の起源である。

文王　武王　太祖　高宗と言った頌徳的な文字を選び、故人の徳を千載に貽すのである。

一一

併し、この諡号の思想は、果して帝王の偉績を追慕して贈呈、以って後昆に伝えたもの、とする表面的な解釈でよいのであろうか。寧ろ、これこそ、一種の民主思想で、国民が治世者を牽制するための巧みな一条の縄ではないか。

治世者の歿後、その人の生前の治績を検討吟味するのは、その国民の方である。

とすれば、国民は帝王を監視しておることとなる。仁政を施した帝王は「仁宗」であるが、虐政を致せば「孟宗」と言われるかも知れない。

中国人希願の最大は、税金の安い事である。苛政誅求は、治世家最大の凶悪である。

このごろの中国では、かかる事はあるまいけれども、明治末年頃の実話であると、ある碩学から聞いた話がある。

ある地方に新任の地方官が任命されて赴任する。間もなく、その土地の然るべき所に、新任長官（村長の辺までを含む）の頌徳碑が建てられる。その治績が永久の未来まで伝えられる事になる、そうであった。

それを、詮じ詰めると、その新任者の悪政封じであり、具体的に言えば、税金を安くさす事である。

何となく首肯のできる物語ではないか。

そうなると、仁宗　安宗という諡号が、何を意味したものであるか。孝宗　穆宗　僖宗には、どうした含みがあるかを、推察し得るのではないか。

一二

唐制を以って国政の基準としたわが大化改新の政治について制定された『大宝令』には、諡の規定がある。「生時の行迹を見て、死後の称号となす。即ち、天地を経緯するを文となし、乱を撥き正に反するを武となす類」と解釈せられておる。つまり、わが国の諡号も、故帝御一代を、後世の人が検討して然るべき追称を奉る事であって、全く中国の風習そのままの移植である。

天平勝宝三年（七五一）十一月淡海御船が神武天皇以下聖武天皇までの諡号を撰び奉った。それが佳例となって、桓武天皇まで続いた。大唐国に心酔した時代の事であり、唐文化摂取に懸命であった時代人としては、恐らく心ゆくばかりの新鮮味であったろう。

ところが、嵯峨天皇の頃になると、反唐の思想が、芽を吹き初めた。

それは、一面において、大唐国の国勢に傾斜が見え、その圧力に凄味が無くなったからでもある。仏教においても、書風においても、唐文化の模倣から一歩脱却しようとする大和心が起ったのであった。唐文化心酔への反省が湧いた。

諡号の制にも、批判が加えられた。

諡号を奉る以上、なるべく故人を傷けたくないから、善言美字が撰ばれるであろうが、それよりも、そのもとになる考え方、即ち、臣民が帝王の行績を、良かれ悪かれ、吟味するという事が、和風の思想ではない。万世一系の天孫と仰いでおるわが国では、易姓革命の思想はない。惟神である皇尊（すめらみこと）に露程の錯誤はあるべきではない。臣民が、御宇をあれこれと、言挙げすべきではない。

だから、もし撰び奉った諡号が　仁寧　聖栄　応徳　であろうとも、かかるものを奉呈すべきではない。その出発点が、和風ではない。

こうした和様思想が抬頭したのが嵯峨天皇の時代である。嵯峨天皇は先帝に奉るに「平城」という御関係のある地名を以って諡号とされた。御親らも御陵のある地名「嵯峨」を以ってされたのであった。この事は、是非ともに、注目しておいてほしい。

但し、こうした新思想というものは、新興してそれで直ちに旧思想を圧倒してしまうものではなく、再び、古い思想は、しばらく、反動的に蘇生するものである。

その後、仁明天皇文徳天皇清和天皇陽成天皇光孝天皇と、しばらく中国風の諡号が行われたけれども、宇多天皇以後は、原則として、中国風は消え去った。

一三

神武　綏靖　安寧　以下の諡号は、たしかに立派な文字であり、五十代に近い列聖の遺蹟に相応しい文字で、それを選定した淡海御船の苦心の程は充分に敬意を払うべきであるが、そこに一つの不思議が伏在する。中国の諡号は　武王　太宗　哲宗　煬帝であって、みなみな一文字であるに対して、わが国のそれは、すべて二文字である事を、考えて見なければなるまい。

新羅の儒理王　孝成王　元聖王　憲徳王。百済の温祚王　多婁王。高麗の璃瑠王　慕本王。みな二字名であって、これは日本と同列である。三韓は中国の属邦である。

淡海御船が諡号を撰定した時に、一字名と二字名との間にある格段の格差に、気付かなかったか。気付いてはおったけれども、二字にしなければならなかった裏面があったのではないか。

一字姓と二字姓

一字にする事には、唐国の允許が無かったのか。こうまでして、身を屈しなければ、唐文化が舶来しなかったのか。もう一つ逆に考えて、こうした事が、新進文化であると考えた浅薄文化人がおったのか。

一四

わが国の地名、特に国名にも、同様の企図があった。正確な年次は判らないが、天智天皇の頃の事であろう。国名をすべて二字にした。津が摂津、泉が和泉、木が紀伊、粟が阿波、農が美濃（御濃）、豆が伊豆、科が信濃。

これまた中国の楚　遼　斉の一字に対する二字である。

越が越前越中越後に、丹が丹波丹後に、豊が豊前豊後に、火が肥前肥後になった事は、一国を細分したから、やむなく二字にしたのであるにしても、これまた、その原の国名は、一字であったものを、この際とばかりに、二字にしたものであろう。

一五

ここで、眼を国外に向けて見ると、やや後代の事になるが、醍醐天皇の延喜十八年（九一八）北鮮に新らしく建国した高麗は、太祖　定宗　光宗　成宗という一字名の諡号を採用しておる。それが唐国滅亡の直後の現象である事から推すと、この一字名には、もう唐文化の圧力が含まれていないのであろう。この時の高麗は、唐の属邦でないと言う面目を、この諡号に懸けておるのではないか。

一六

ここまで言えば、もう私の狙った点が何であったか、が判明するであろう。

嵯峨天皇の時以来、皇親の臣籍降下に際して与えられた姓が「源」であり「平」であることは、唐文化に屈伏して、その言うがままになっておる日本文化でないこと、少くとも、唐朝と対等であるとする大和心（和様）の発露ではないか。源信　源融　平高望は、その点で藤原や清原、物部や大伴、佐伯らとは段の違う貴称であるという含みを以って、源　平の氏名を歓迎したものであり、臣籍降下を嬉々諾々として受容し

たものであろう。

河原左大臣源融の得意顔が見えるようではないか。源融の文化人たる心構えに、実に壮大であった心の底があり、そこに、この嫩ある事を認めると、彼もまた、なつかしい日本人の一人である。

一七

最後に附言したい事がある。

紫式部の源氏物語において、その主人公は「源」であった。その名は「光」である。その長男の名も「薫」である。光源氏の随従者は「惟光」で、二字名である。

「光」「薫」が他の男姓とは断然違う貴称であることを、この一字名で示しておるのではないか。

紫式部は藤式部であって藤原式部ではなかった。「枕草紙」の著者は、清原少納言でなく、清少納言であった。

「藤」は藤原の略称ではない。「清」は清原の略称ではない。別箇の思想に立脚した文字である。

一字名と二字名とには、画然たる差格がある。

その点に言及した国文学史のない事が淋しい。

藤式部、清少納言、の呼び名は、中国かぶれの呼び方であるのか、中国と対等に立とうとする大和心から、のものか。

源氏物語や枕草紙の背後にある漢意と和風との十字架を、教えてほしい。